

名古屋港で発見されたドングリシャミセン

横井 敦史 川瀬 基弘

愛知みずほ大学人間科学部 〒467-0867 愛知県名古屋市瑞穂区春敲町2-13

A record of *Lingula rostrum* (Shaw, 1798) from the Port of Nagoya, Aichi Prefecture, Japan

Atsushi YOKOI Motohiro KAWASE

Department of Human Science, Aichi Mizuho College, 2-13 Shunko-cho, Mizuho-ku, Nagoya, Aichi 467-0867, Japan.

Correspondence:

Motohiro KAWASE E-mail: kawase@mizuho-c.ac.jp

要旨

ポートアイランド（名古屋港の人工島）の東～北東側水深2 m付近からドングリシャミセンガイ *Lingula rostrum* (Shaw, 1798) が発見された。愛知県にドングリシャミセンガイが棲息していたという文献情報はなく、移入個体群である可能性が示唆された。

はじめに

「レッドデータブックなごや2015」の改訂ため、2018年10月20日に名古屋港のドレッジ調査を実施した。調査対象は貝類およびカニ類であったが、名古屋港の水深2 m付近からシャミセンガイ類（腕足動物）が2個体得られたので報告する。

調査記録

調査はポートアイランド（名古屋港の人工島）の東～北東側で実施した。開口部の幅が75 cmのドレッジを用いて水深2 m付近を調べた。底質はおもにシルト～粘土質であった。殻長約26 mmと19 mmの2個体のシャミセンガイ類が得られた（図1）。形態的な特徴から2個体ともにドングリシャミセンガイ *Lingula rostrum* (Shaw, 1798) に同定された。本種の形態的特徴については、倉持ほか（2013）を参照されたい。

標本の検討

愛知県では木曽川、矢作川、豊川の河口域（砂泥干潟）においてミドリシャミセンガイ *Lingula anatina*

Lamarck, 1801 が棲息していた記録があるが（倉内ほか, 1985）、近年はほとんど発見されていない。倉内ほか（1985）は、ミドリシャミセンガイが日本各地で死滅し、愛知県もその例外ではないことを述べている。また、和



図1. 名古屋港で発見されたドングリシャミセンガイ

田ほか (1996) も、かつて日本各地の内湾で普通にみられたミドリシャミセンガイは全国的にその棲息地が激減していることを述べている。例えば、汐川干潟では1974～1975年にシャミセンガイの記録があり (梶山, 1975), 1998年の調査では発見されず絶滅したと推定されたが (藤岡・木村, 2000), 2015年の調査結果では約40年ぶりにシャミセンガイ類の死殻が発見されている (木村, 2016)。これらの文献情報や近年の現地調査などから、愛知県ではミドリシャミセンガイを含むシャミセンガイ類は、1990年代には既に絶滅していたと思われる。ただし、ミドリシャミセンガイとして記録された標本写真のないリストのみの文献情報の種同定が正しいか否かは不明であり、ウスバシャミセンガイ *Lingula reevei* Davidson, 1880やドングリシャミセンガイなどの誤同定である可能性も完全には否定できない。

日本近海からは、ミドリシャミセンガイ、ウスバシャミセンガイ、ドングリシャミセンガイ、オオシャミセンガイ *Lingula adamsi* Dall, 1873の4種が報告されており (倉持ほか, 2001), 最近5年間くらいで三河湾や伊勢湾の数ヶ所で発見が相次いでいるシャミセンガイ類は、今回報告する種と同様にドングリシャミセンガイである可能性が高い。少なくとも直接標本を確認した佐久島や知多半島の個体については外部形態によりドングリシャミセンガイに同定できた。

愛知県に昔からドングリシャミセンガイが棲息していたという文献情報はなく、ここ数年の間に県内各地で発見されているドングリシャミセンガイと考えられる個体は、近年侵入した外来種である可能性も否定できない。例えば、大越 (2004) は、輸入アサリに *Lingula unguis* (ミドリシャミセンガイ *Lingula anatina* のシノニム) が混入して日本に侵入していることを指摘している。ここ数年で愛知県内での発見が相次いでいることから、県内のドングリシャミセンガイが移入個体群である可能性も検討すべきであろう。

謝辞

この報告をまとめるにあたり、葉山しおさい博物館の倉持卓司氏にはシャミセンガイ類の同定について貴重なご意見をいただくとともに文献資料などをご紹介いただいた。ドレッジ調査は木村昭一氏と佐藤達也氏にご協力いただいた。以上の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

引用文献

- 藤岡エリ子・木村妙子. 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.
- 木村妙子. 2016. 汐川干潟サイト. 日本国際湿地保全連合. 平成27年度モニタリングサイト1000磯・干潟調査報告書, pp. 97-102. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 倉持卓司・木村キワ・藤本和恵. 2001. 日本周辺海域産シャミセンガイ属の再検討. 南紀生物, 43(2): 112-116.
- 倉持卓司・上野香葉子・厚井晶子・長沼 毅. 2013. 瀬戸内海から採集されたドングリシャミセンガイ (腕足動物門, 無関節綱, シャミセンガイ科) の分類学的再検討. 生物圏科学 Biosphere Sci., 52: 45-50.
- 倉内一二・佐藤徳次・原田猪津夫・安藤 尚・原田一夫・池田芳雄. 1985. 愛知県の自然環境1984. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋. 244 pp.
- 大越健嗣. 2004. 輸入アサリに混入して移入する生物—食害生物サキグロタマツメタと非意図的移入種. 日本ベントス学会誌, 59: 74-82.
- 梶山正雄. 1975. 汐川河口部干潟底生生物の調査報告. 汐川河口部自然環境調査グループ. 55 pp.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏. 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. WWF Japan サイエンスレポート, 3: 1-182.